

第2回 小学校教育の現状と今後の在り方検討委員会 会議要旨

- 1 日時 平成29年9月21日(木) 13:30~15:30
- 2 会場 東京都庁第一本庁舎42階 特別会議室B
- 3 出席者 坂野委員(委員長)、藤崎委員、桶田委員、種村委員
出張委員(副委員長)、増淵委員、江藤委員、安部委員

4 議事概要

- (1) 第1回小学校教育の現状と今後の在り方検討委員会の主な意見の報告
- (2) 小学校教育の現状と課題について
事務局から資料を説明後、意見交換

▽ 5歳児の発達状況等

- 幼児の読み書きの能力は伸長しているが、生活力やコミュニケーション能力等、課題となっている力もあるのではないかと。伸長している学習に関わる面と、更なる指導が必要になってきている自立に関わる面との調整や配慮が必要である。
- イギリスでは4歳から就学することも可能であり、協働的な学習を行っている。「教員が何を教えるのか」ではなく、「子供が何を学ぶのか」に重点が置かれている。教員がコーディネーターの役割を担っており、まさに日本の幼稚園に近い。
- 幼稚園においても、特別な支援が必要な幼児や、気持ちの面での支援が必要な幼児がおり、学級集団が不安定になる事例がある。園全体で担任をフォローする体制が大切である。
- 幼少期に音声言語以上に文字言語を教育することの効果等は、科学的に明瞭になっておらず、慎重な対応が必要である。
- 多様な子供たちの状況に対応するためには、基礎的な学習と発展的な学習等の、個に応じた手だてを用意し、授業の中でどちらも扱えるようにすることが必要である。あわせて、担任だけではなく、学年や学校体制での対応も大切である。

▽ 小学校における教育の質の担保

- 小学校における英語教育は、授業の準備、ALTとの調整、質の確保等の面からも専科化を進める必要がある。
- 音楽や図工の場合、専科教員の指導と担任の指導では、全く違う。同じように英語でも専門の教員が入り、研修を積むことにより、徐々に授業力も高まり、効果があるのではないかと。
- 授業の質を高めるためには、学級担任でうまくできる場合と、専科教員が行う方がよい場合とがある。その効果検証の在り方も考えることが必要である。
- 幼稚園と小学校との交流は、生活科の学習で行うことが多いが、音楽や図工の専科教員による幼児への指導も効果的である。
- 小学校における英語指導については、英語教科化の目的、専科教員に求めることの明確化、現実の人材などを考慮することが必要である。
- 義務教育においては、理科教育の重点化が必要である。また、音楽、図工も大切である。
- ICTの整備・活用状況については、地区や学校によって差がある。ニュージーランドでは、子供たちがタブレット等を活用し、協働的な学習も行っている。